

アメリカ文明とイスラエル

ユダヤ・キリスト教の聖書解釈を手がかりに

堀内 一史

目次

- 一 はじめに
- 二 神に「選ばれし民」と神の「約束の地」の起源
- 三 アメリカにおける「選ばれし民」と「約束の地」
- 四 「自由」と「解放」のモチーフ
- 五 アメリカ史における千年王国論という終末論
 - 1 千年王国論とは
 - 2 初期のアメリカ史と千年王国論
 - 3 南北戦争と千年王国論
- 六 アメリカ近現代史における終末論
 - 1 デイスベンション主義
 - 2 初期のデイスベンション主義者とキリスト教シオニズム運動
- 3 現代のキリスト教シオニスト

七 現代アメリカにおけるイスラエル支持とキリスト教

- 1 イスラエル建国以降のアメリカ政府によるイスラエル支持
 - 2 アメリカ国民のイスラエル支持およびその理由
- 八 おわりに

一 はじめに

文化がある特定の地域に根差し特殊化していくものであるなら、文明は拡張し普遍化していくものであろう。アメリカを文明という巨視的な視点で眺めたとき、そこに見えてくるのは、ヨーロッパ、特にイギリスを形成したキリスト教文明の抑圧的な一形

態から自らを解放し、分離したアメリカの姿である。アメリカ革命は脱ヨーロッパという歴史的過程の一部であった。これによりキリスト教文明の一形態が新大陸にもたらされた。

この旧世界からの離脱運動は聖書に基づく宗教的解釈を伴った。それはモーセ五書などのユダヤ教の聖典を内包するキリスト教の特殊性に負うところが大きい。その結果アメリカ人は独立前の植民地時代より、ユダヤ・キリスト教の立場から聖書を拠り所に自らの進むべき道に正統性を付与してきた。たとえば「出エジプト」に自らの姿を重ね、ヨーロッパは「エジプト」であり、アメリカは「約束の地」であると見なして自らを古のイスラエルの民に擬え、「新しいイスラエル」と呼ぶこともあった。

イスラエルの民と共有する、神による選民という自己認識は、神の計画の中に世界救済の使命、その救世主的機能を担う民という意識および悪に対する善の最後の戦い、すなわちハルマゲドンを含む終末観を伴った。一七世紀初頭に抑圧的なイギリスからニューイングランド地方へと移住したピューリタンによってもたらされたのは、ほかならぬ、この選民意識と千年王国到来の預言を伴うキリスト教の終末論であった。

こうした聖書の解釈は、アメリカ革命、南北戦争、二〇世紀の公民権運動のみならず、一九世紀末の米西戦争、二つの世界大戦

や冷戦期のベトナム戦争といった対外政策、あるいは歴代大統領の就任演説や議会への教書など、アメリカ史の出来事の随所に色濃く投影されている。この聖書の解釈は、「イスラエル」という原型を自らに投射する形で、世界に比類なきアメリカ文明を形成していったのである。

アメリカ文明における「イスラエル」という原型が、一九四八年のイスラエル国の建国に伴い現実のものとなるや、アメリカによる同国への直接的な援助が顕在化する。それ以来今日まで、アメリカは積極的に有形無形の支援の手をイスラエル国に対して差し伸べてきた。第二次世界大戦以降アメリカ政府がイスラエル国に対して行ってきた対外援助の累積額はアメリカの対外援助の中で最大規模である。

イスラエル国に対する議会の強力な支持がなければ通常の対外援助の範囲を超えた支援は不可能といわれる。こうした議会の支持は、ユダヤ系アメリカ人や関連組織による議会へのロビー活動がその背景にあると一般に認識されている。確かにユダヤ系アメリカ人によるシオニスト運動はイスラエル・ロビーの一翼を担ってきたが、そのみでは議会を動かし、持続的な支援は行えない。

持続的な支援は、イスラエル・ロビーのもう一方の担い手を必

要とした。それは、キリスト教保守派の指導者とその関連組織である。そればかりか、一般のアメリカ国民にもイスラエルは支持すべき国という認識が広がっている。アメリカ国民の最大六割がイスラエルを支持しているという調査結果からも、イスラエル支持の広がりや奥行きを窺い知ることができる。

イスラエル・ロビー、議会、政府のみならず、かくも多くのアメリカ国民がイスラエルを支持する理由とは何であろうか。本稿では、こうした問題意識を念頭に置きながら、アメリカ文明における「イスラエル」の意味について考察を加える。すなわち、選民意識の起源に遡って、千年王国論という終末論を手がかりにアメリカ史を足早に辿り、現代アメリカのイスラエルに対する、いわば国民的支持の経緯や根拠について考えていきたい。

二 神に「選ばれし民」と神の「約束の地」の起源

旧約聖書の「創世記」において、神はアブラム（後のアブラム）を選び、このように述べる。

あなたは生まれ故郷、父の家を離れてわたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める。祝福の源となるように。あなた

を祝福する人をわたしは祝福し、あなたを呪う者を私は呪う⁽¹⁾。こうしてアブラムとその子孫は神による選びに与り、神の庇護を受けることになる。その後アブラムが九九歳になった時に、神はアブラムに現れこう語る。

わたしは全能の神である。あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい。わたしは、あなたとの間にわたしの契約を立て、あなたをますます増やすであろう。

アブラムがひれ伏すと、神はこう続ける。

これがあなたと結ぶわたしの契約である。あなたは多くの国民の父となる。あなたは、もはやアブラムではなく、アブラハムと名乗りなさい。あなたを多くの国民の父とするからである。（中略）わたしは、あなたとの間に、また後に続く子孫との間に契約を立て、それを永遠の契約とする。そして、あなたとあなたとの子孫の神となる。わたしは、あなたが滞在しているこのカナンのすべての土地を、あなたとその子孫に、永久の所有地として与える。わたしは彼らの神となる⁽²⁾。

こうして、アブラハムとイスラエルの民は子子孫孫まで、カナン（パレスチナ）を「約束の地」として神から譲り受けることになる。その後、約束されたカナンが飢饉に見舞われ、イスラエル

の民はエジプトに逃れ、四〇〇年の間捕囚となる。紀元前一三世紀ごろ預言者モーセが登場する。イスラエルの民はモーセに従い紅海を渡り「約束の地」カナンを目指す、四〇年間荒野を彷徨し、モーセはシナイ山で神より十戒を授かる。ところがモーセはピスガの山頂で神の命令に従いこの世を去る。後継者ヨシヤが民を率いてカナンへと至る。やがてカナンに一二部族の連合体が成立し、ダビデ王、ソロモン王が君臨し、王国は栄える。ソロモンはエルサレムに壮麗な神殿を建設するが、王国は分裂し、紀元前五八六年にバビロニアに滅ぼされ、五〇年間捕囚となる。解放された後、エルサレムに帰還。神殿を再建する。その間に、ユダヤ教は次第に成立していく。しかしながら、イスラエルは紀元前七〇年にローマ帝国に征服された後、一九四八年のイスラエル建国までの一八七八年の長きにわたって、ディアスポラを経験することになる。

三 アメリカにおける「選ばれし民」と「約束の地」

一八三二年にアメリカ合衆国を旅行したアレクシ・ドゥ・トクヴィルは、一八三五年に母国フランスで『アメリカの民主政治』を出版している。トクヴィルは、その中に「アメリカの全運命は

アメリカの海岸に到着した最初の清教徒に含まれていたように思われる。それはあたかも最初の人間に全人類がとじこめられていたのに似ている」と書いた。⁽³⁾

イギリスによる新大陸アメリカへの入植事業は一六〇七年ヴァージニア植民地に始まるとされるが、アメリカ文明に決定的な影響を与えたのは、トクヴィルが直観したように、それより一三年遅れてヴァージニア植民地よりも遙かに北、現在のマサチューセッツ州プリマスに到着したピルグリム・ファザーズ（巡礼父祖）と後に呼ばれるようになるピューリタン（清教徒）たちであった。特許状を得ていたヴァージニアとは異なる土地への入植は、乗員に大きな不安を与えたに違いない。実際には、一〇二名のうち四一名が、本国イギリスでの宗教的迫害を逃れて植民地にやってきた、国教会からの分離を目指す敬虔な分離派ピューリタンであった。

ここでもっとも注目すべきは、彼らにとってもその後続く入植者にとっても、「初めからアメリカそのものが宗教的な意味をもっていた」という点である。この点を理解するために「メイフラワー盟約」を見ておこう。

神の名において、アーメン。

下にその名を記したわれわれは、神の恵みにより、大英

国、フランス、アイルランドの王、信仰の擁護者であるわが君主ジェイムズ王の忠実な臣下である。

われわれは、神の栄光のため、キリスト教の信仰を増進するため、わが王と祖国の名譽のために、ヴァージニアの北部地方に最初の植民地を建設するため航海してきたものであり、この証書によって、神と、おたがいの前で、おごそかに、また相互に、契約を結び、一つの政治団体に結合し、いっそうよき秩序を保ち、生活を維持し、前述の目的を促進しようとするものである。またこの政治団体の力により、植民地全体のために、きわめて適切かつ適当と思われる正当で公正な法律、法令、条例、憲法そして官職を、随時制定、組織せんとし、それに当然の服従をなし、それを遵守することを約束する。⁽⁵⁾

こうして渡航した分離派ピューリタンではあったが、プリマスの冬は特に厳しく、翌年の春を生きて迎えたのはわずかその半数であったといわれる。その後皮肉なことにも、プリマス植民地は、後のマサチューセッツ湾植民地に吸収されてしまう。

マサチューセッツ湾植民地は、一六二九年、六隻の船で三〇〇人のピューリタンが一四〇頭の牛や山羊を伴ってセーラムに入植したことに端を発する。翌三〇年には、一〇〇〇人の入植者と、

ピューリタンのジョン・ウインスロップ総督がボストンへと送り込まれ、本格的な入植事業が始まった。⁽⁶⁾ この植民地は総督が思い描いた「丘の上の町」の実現を理想として掲げるなど、宗教的なビジョンをもった会衆派による政治・宗教共同体であった。その意味で、彼らは、ピルグリム・ファーザーズよりも遥かに明確に、神に「選ばれし民」として自己を認識していたといっただろう。ジョン・ウインスロップは『キリスト教徒の慈愛のひな型』(二六三〇年)の中に、つぎのように述べている。

かくて神とわれわれのあいだには、目的が存在する。われわれは、この事業のために神との契約に入ったのである。われわれは神の委任を受けいれ、神はわれわれに規約をつくることを委ねられた。われわれは、われわれの目的を達成するために、実行にうつることを宣言したのだ。(中略) 平和の絆において霊の一致を保ちうるならば、主はわれわれの神となり、われわれを神の民として、われわれのあいだに喜んで住み給うであらう。そして主の知恵、力、善、真理を以前にもましてよく見るように、主はわれわれ一〇名が一〇〇〇名の敵に対抗しうるとき、また神がわれわれを称賛と光榮の対象となし、後に続いて建設される植民地について人びとが「主なる神はこれをニューイングランドの植民地のようにな

し給うた」というようになるとき、イスラエルの神がわれわれのあいだに給うことを知るであろう。というのは、われわれは丘の上の町⁽⁷⁾となり、あらゆる人の目がわれわれの上に注がれることを、考えねばならぬ。⁽⁸⁾（文中のゴチックは筆者による。）

ウィンスロップにとって、植民地事業とは、神との契約に立つものであり、神の委任を受けいれた任務という信念に根差し、神の意志に従って人間が地上に宗教共同体を形成することであった。ピューリタンたちはイギリス本国では宗教改革を全うすることのできなかつたが、ニューイングランドにおいてその機会が到来した。この壮大な事業が実現すれば、荒野における彼らの植民地は全世界に対する道徳的、政治的な模範として「丘の上の町」になり得ると考えたのである。

この表現は、これ以降「アメリカの使命感とは、世界に冠たる」「丘の上の町」を建設することであり、アメリカは「世界のモデル」であるべき、といった文脈で使われるようになった。⁽⁹⁾時代は下って、一九八四年七月四日、伝統的価値の復権を主張し、強いアメリカを標榜したロナルド・レーガン大統領は、アラバマ州デイトナーで開催された建国記念行事で、アメリカが「無限の可能性を秘めた国」であり、自由の「かがり火」であり、「全

世界にとって丘の上の輝ける町」として存在していると述べている。⁽¹⁰⁾

四 「自由」と「解放」のモチーフ

聖書解釈の方法に予型論 (typology) 的解釈法というものがある。これは、旧約聖書の記述の中にひな形が存在し、それが新約聖書に投影されているという認識に立ち、両者間の並行関係を前提に行う解釈法である。アメリカ史においては、旧約聖書に記されている出来事を史実に当てはめて意味づけし、理解しようとする一種の解釈法ということが出来る。神と契約を交わし、神の選びに与ったピューリタンたちは、この予型論的な解釈によって自らを古代イスラエルの民のイメージに重ねて、歴史において自分たちが占める位置を確認していった。

「アメリカの市民宗教」という概念を用いてこの問題を扱ったロバート・N・ベラーは、古代イスラエル人と選民思想を共有するアメリカ人は、自らを「神の新しいイスラエル」として見ていたと主張する。たとえば、「合衆国の人々は、地球上のどの国民よりも、古代イスラエル人と並行関係に近いものがある」としばしば言われてきた。『われわれのアメリカのイスラエル』という表

現がしばしば使用され」当時のアメリカ人の間には、この表現が「適切であるという共通認識」があった、としている。さらに、「ヨーロッパはエジプトであり、アメリカは約束の地である。神は、すべての諸国民に示す光明となる新しい種類の社会秩序を打ち立てるべく、その民を導いた」⁽¹⁾とも述べている。

アメリカ革命は、本国の中央議会に代表者を出すことも許されず、一級市民として扱われてこなかった植民地人にとつてみれば、エジプトに隷属状態に置かれていた古代イスラエルの民が約束の地カナンを目指し脱出する、「出エジプト」という出来事と類似した経験であったに違いない。この革命において植民地人を束ね総司令官として祖国イギリスと戦った初代大統領のワシントンは当時、出エジプトに登場するモーセに例えられた。

当時「アメリカ革命を」「もうひとつの奴隷の館、第二のエジプトからの奇跡的な解放」と呼び、七月四日をイスラエル人が「エジプトから連れ出された」日になぞらえ、かつて「モーセを認め奮起させた」ように「神はワシントンという人物を奮い立たせた」と主張するスタイルが一般化した。(中略) それぞれの救済者の物語で最も重要な部分は、彼らがあらかじめ実行するように運命づけられていた大義、すなわち民族の解放だった。抵抗を始めた当初、抑圧されていた二つ

の国は、どちらも勝利への希望をほとんどもっていないかった。しかし、二つの抑圧された民族にしてみれば、彼らの目的が無益なものに思えたからこそ、彼らの解放者が全能なる神の代理人だと認めるほかなかったのだ。解放のプロセスの類似点はさらに存在する。ニューイングランドのピーター・フォルソム牧師は「モーセはイスラエルの民を引き連れて紅海を渡った。ワシントンはアメリカ人を率いて血の海を渡ったのではなからうか」と語った。⁽²⁾

このような解放のモチーフは、アメリカ革命に止まらず二〇世紀の公民権運動にも影響を与えている。公民権運動の指導者マーティン・ルーサー・キング牧師は、カラー・ブラインドな人種統合を運動の目標に定め、そうした社会を、予言論的な聖書解釈を駆使して、「約束の地」に例えた。彼は奴隷解放の宗教的歴史という視点から、黒人の経験を解釈し、出エジプト記の枠組みの中に公民権運動を位置付けることで奴隷の予言論を復活させた。キングは、人種隔離主義者を南部のファラオに見立て、一九五四年の合衆国連邦最高裁判所による「ブラウン対教育委員会」判決を、「紅海の水を分ける」出来事に例え、このように述べる。⁽³⁾

後ろを振り向けば、人種隔離主義という勢力が海岸で徐々に死んでゆくが見える。問題はまだまだ解決には程遠く、

前途にはまだ巨大な抑圧の山々が立ちはだかつているが、少なくともエジプトを脱出したのであるから、後は辛抱強く堅い決意をもって、どんなことがあっても、約束の地にたどり着くのである。⁽¹⁴⁾

キング牧師は一九六八年テネシー州メンフィスのモーターで暗殺者の凶弾に倒れる前夜「わたしは山頂に行った」と題した説教で、自分自身は行けないかもしれないけれども、教会に集まった会衆は「約束の地」に必ず行くことができると強調した。⁽¹⁵⁾ 旧約聖書のモーセもピサガの山頂から「約束の地」カナンを一望したあと、神の命に絶対的に服従し絶命した。

自由が蹂躪されている人々の「解放」や他者の「自由」の回復というイメージは、アメリカ革命や公民権運動にも投射されていたが、これらは、アメリカ史の中他の出来事においても見出すことができる。

ひとつは、一八九八年二月一日、ウィリアム・マッキンリー大統領がアトランタで行った、米西戦争後のフィリピンの領有をめぐる演説である。一九世紀アメリカのフロンティアの拡大と帝国主義的膨張政策は、「明白なる運命」と結びつき、アメリカは天より授かった使命を担っている、と当時のアメリカ人に理解されていた。いまひとつは、二〇〇三年一月二八日に行われたジ

ョージ・W・ブッシュ大統領の議会への一般教書演説である。一九八〇年以降のアメリカ社会の保守化傾向の絶頂期、「アメリカ帝国論」が声高に議論されたブッシュ保守政権時代に行われたものである。⁽¹⁶⁾

迫害された民に自由を与えるという解放のモチーフは、出エジプト記のファラオやエジプト軍などの敵の駆逐を含意している。その民を率いた神はその敵を絶滅させることを暗に含んでいるのである。すなわち、解放のモチーフは、選ばれた民の救済と神による反神的な権力国家の破壊を伴い、選ばれた民は「主の戦い」を遂行する。そのために、その戦いは多くの場合「十字軍」という形態をとる。⁽¹⁷⁾ こうしてアメリカは、「迫害された聖徒たちの避難所」、「自由と民主主義的自治の実験」場から、「世界的使命を担った世界権力」になっていくのである。⁽¹⁸⁾

こうした議論は極めて興味深いことではあるが、ここでは以上のことを述べるに留め、千年王国論について考察を進めて行くことにしよう。

五 アメリカ史における千年王国論という終末論

1 千年王国論とは

千年王国論とは、救世主が再臨し「神の国」がこの地上に建設されるという思想である。これは終末論の一形態であり、救世主待望論に起因する。古代ユダヤ教では、第一に、イスラエルの民族が祖地から追放されるという現実世界の危機状態が前提としてある。第二に、その後に危機状態でのユートピア実現への希望が生まれる。ただ、この思想ではユートピアは来世に存在するわけではなく、一貫して現世で実現すると認識されている点は重要である。第三に、救世主が出現して敵対する者を撃破するという、これら三つの要素からなっている。⁽¹⁹⁾すなわち、追放という危機的状況↓救世主到来への希望↓救世主到来と敵の絶滅という図式である。

キリスト教はこの救世主待望論を受け継ぎ発展させた。「ヨハネの黙示録」を拠り所として、救世主イエスが再臨し、千年の間ユートピア的な世界を統治するというものであり、その前に世界は劣悪化して「反キリスト」が出現し、ハルマゲドンと呼ばれる最終戦争を経て、イエスが勝利するという展開である。歴史的には、国王やローマ教皇もしくはローマ・カトリック教会が「反キ

リスト」として敵対視されてきたが、その意味で、千年王国論は、革命の精神的拠り所となりうる神学思想であったといえる。

では、千年王国論の起源をどこに辿ることが出来るのであろうか。ここでは、ドイツの神学者ユルゲン・モルトマンに従って、千年王国論が依拠し、千年王国論に対する「最も重要な新約聖書の箇所」とモルトマンが述べる「ヨハネの黙示録」第七章と二〇章の関連する記述を確認しておこう。まず、七章によれば、

終末の時のために「印を押された者」、すなわち選ばれた者は、イスラエルの一二の部族から一四万四千人、そしてその後、あらゆる国民から「数えきれないほどの大ぜいの群衆」が呼び集められ、天使たちと共に、神と「小羊」なるイエス・キリストを礼拝する。これは、「大いなる艱難をとおってきた人たち」で、すなわち神なき諸権力に抵抗し、深淵から上ってきた獣を拝まなかった者たち、イスラエルとキリスト教の殉教者たちである。⁽²⁰⁾

次に、黙示録第二〇章四節によると、

「イエスの証しをし、神の言葉を伝えたために首を切られた」殉教者が、「獣をもその像をも拝まず、その刻印を額や手に受けることをしなかった」ために、キリストと共に、「千年の間」生き、支配し、さばく、これが、「第一の復活」

である。殉教者たちは、「神とキリストの祭司」となる。この千年の間、サタンは「縛られ」ている。千年が終わると、サタンはしばらくの間、解放される。それから、聖徒たちと愛されていた都エルサレムをめぐるゴグ、マゴグとの最後の戦いが来る。その後、大いなる神のさばきによって、終わりがくる。⁽²¹⁾

千年王国論は、ここに描かれているキリストの再臨の時期をめぐって様々な解釈がなされてきた。前千年王国論では、キリストの再臨が先行し、千年王国は再臨の後の未来の時期と信じられている。他方、後千年王国論では、千年王国をもたらすのは人間の努力であり、千年王国はキリストの再臨の前の歴史の時期とされる。非千年王国論は、千年王国論全般を否定するというものである。⁽²²⁾

2 初期のアメリカ史と千年王国論

千年王国論は、一六四一年から四七年までの間にイギリス国内で猛威をふるったピューリタン革命を推進する精神的エネルギーの源として、イギリス国内ばかりか、新大陸アメリカに地歩を固めつつあった植民地の人々の魂にも革命の推進力を提供し、移住者や帰国者が相互に影響し合いつつ歴史を動かしていった。⁽²³⁾

ここで、植民地で千年王国論を説いた二人の人物に目を向けてみよう。ひとりには、ジョン・コットン（一五八四—一六五二）であり、もうひとりには、ジョナサン・エドワーズ（一七〇三—一五八）である。

一五八四年にイギリスに生まれたジョン・コットンは、ケンブリッジ大学で学士号と修士号を取得した弁護士であり、敬虔なピューリタンでもあった。彼はイマニュエル・カレッジの特別研究員となったが、同カレッジはケンブリッジ大学の中でもピューリタン色の濃い学風が特徴であった。コットンは一六〇九年ごろには神の啓示などにより回心体験をし、信仰に目覚める。一六一〇年イギリスで聖職者に叙任されるが、一六三三年に新大陸に渡った。

コットンはニューイングランドでさまざまな説教を行っているが、それらは合計三冊の著作に結実している。『黙示録一三章に關する注解』（一六五五年）の中では、ローマ・カトリック教を、「ヨハネの黙示録」に登場する「獣をも像をも拝まず」の「獣」と見なし、これを徹底的に批判している。『復活する教会』（一六四二年）では、ニューイングランドを中心に据えた批判を展開している。

もし戦いがニューイングランドに対して行われたら、それ

は獣から与えられた権威と権力に由来するものだろう。(中略) その権威と権力は、地獄や大いなる獣、カトリック教会、つまりあの獣の偶像に起因するものだからである。(中略)

神は、我々を獣の権力から解放し、我々をあの獣の似姿にすることから解き放ってくれた。⁽²⁴⁾

このようにコトンは、カトリックを獣あるいは反キリスト的存在と見なして批判を続けたが、神はニューイングランドの解放を約束したのである。こうしたコトンの千年王国論は、開始時期については、「この千年期は反キリストの崩壊とローマの破壊と共に始まる」と述べるにとどまり、キリストの再臨に関しては何も示していない。⁽²⁵⁾

さて、ピューリタン革命が終息し、王政復興が完了してから半世紀の時を経て、ニューイングランドでのピューリタンの「聖徒による支配」という神権政治の熱も冷め、社会の世俗化が進行してきたころ、アメリカが生んだ大神学者ジョナサン・エドワーズは登場する。

一七〇三年、コネチカットの牧師の家庭に長男として生まれたエドワーズは、一三歳でイエール大学に入学し、一七二〇年には首席で卒業する。一七二一年から二六年の間に修士号を取得し、

講師として母校で教鞭を執り、ニューヨークとボストンの教会の牧師を務めた後、四〇年から大覚醒運動の指導的立場に立つて活躍する。

アメリカ社会はもともと牧師や教会員数が少なく、宗教的飢餓状態が続いていた。そうした状況に信仰の潤いと滋養を与えたのがアメリカ史に二度(一七四〇年代と一八〇〇年―三〇年)訪れた大覚醒運動であった。⁽²⁶⁾

敬虔主義に立つエドワーズを代表とする信仰復興運動の指導者たちやその後継者たちは、植民地の古い秩序を擁護する人々と真に向かい対立した。この宗教復興運動が当時の植民地の教区制度を脅かしたからであった。トマス・ジェファソンやジェイムズ・マディソンなど、当時の知識人や文化人は合理主義者であり、神の啓示を否定し、理性に基づき宗教を理解しようとする理神論者でもあった。合理主義者と敬虔主義者という一見して矛盾する立場にある人びとが、宗教の自由をめぐる手を結び、旧態依然とした既存秩序の擁護者と闘った。エドワーズが説いた「千年王国」はジェファソンにとっては共和政治を意味した。独立宣言の起草に当たってジェファソンは、大覚醒運動を牽引した宗教指導者の意見を十分参考にした。⁽²⁷⁾

この第一次大覚醒を導き、その後継者に大きな影響を与えたエ

ドワーズの千年王国論とは、どのようなものであろうか。エドワーズ研究者の野村文子の論考⁽²⁸⁾を参考にしながら、「神の民の目に見えるユニオン」(一七四七年)と「贖いの聖業(みわざ)の歴史」(二七七七年)を手掛かりに、エドワーズの千年王国論の特徴を二点挙げておこう。

第一に、エドワーズの千年王国論におけるキリストの再臨の時期について、彼が破滅や終局といった急激な変化よりも、福音伝道というキリスト者の努力を通じた段階的変化を好んでいることから、エドワーズは「後千年王国論」の立場をとるものと考えられる点である。それは「贖いの聖業(みわざ)の歴史」の一節に「段階的」という表現が頻出することから推測される。

神の偉大な聖業(みわざ)は確かにすみやかにではあるが段階的になされるということである。イスラエルの民がバビロンの幽囚から最初は一つの集まり、次にもう一つの集まりという風に段階的に解放され、彼らが都市や神殿を段階的に再建したように。そして、異教徒たちのローマ帝国が、たとえ福音の普及こそ迅速に行われたけれども、段階的に破壊されたように。それ故、たとえ神の聖業が突然にもたらされ、多くの驚くべき偉大な出来事が突然に起り、サタンの見える王国の一部が突然に倒れるように見えようと、それは

決して、何か偉大な奇跡によって成し遂げられるのではない。それらはすべて、福音を説き、神の恩寵を多くの人々に伝えるという日常的方法を用いることによって、つまり、段階的に成し遂げられるのである。⁽²⁹⁾

第二に、エドワーズが千年王国やキリストの再臨に関してかなりの程度具体的なイメージを抱いており、自身が牽引役を果たした大覚醒運動という福音伝道を広める必要があった点である。エドワーズは、「神の民の目に見えるユニオン」(一七四七年)において、キリスト教の愛によるユニオン(結束)の重要性を強調する。その上で、キリスト教会は、一つの「聖なる社会」であり、ユニオンが顕在化し、「目に見える形」になることを重要視する。さらに、「人々は共通の繁栄のために合意に基づいて連合し、神に祈る。そして、その共通の繁栄と進歩はとも言葉で表せない位に崇高で栄光に満ちたものであり、神が最後の日に実行される」と約束されたものである⁽³⁰⁾と説いた。

以上、ジョン・コットンとジョナサン・エドワーズの千年王国論を見てきた。コットンの千年王国論はカトリックを反キリストとしつつ、キリストの再臨については何も語っていない。エドワーズにあつては、段階的進展を重視し、福音伝道を主体とする後千年王国論に立つ終末論であった。

それではここで、アメリカ革命期における千年王国論を見ておこう。ネイザン・O・ハッチはつぎのように述べているが、革命期に、かなり世俗化された千年王国論が受け容れられていたこと、そしてイギリスが反キリストと見なされていたことを見てとることができる。

アメリカ革命期の市民的千年王国論は、敬虔主義者の信徒ばかりか合理主義者によっても提唱されたが、それは、印紙条例の危機から直接生じ、発展したものであった。(中略) 市民的千年王国信仰は、神の目的として自由を推し進め、第一の敵は在来の宗教にとつての反キリストではなく、市民社会への圧制という反キリストだと決めつけた。また、市民的千年王国信仰は、その過去にまつわる神話を、建国父祖たちの血の通った宗教の発展にではなく、政治的な発展にたどり、そしてその矛先をニューイングランドに限られた遺産にではなく、イギリス人の特権へと向けた。⁽³¹⁾

アメリカ革命は、大覚醒という広範囲にわたる信仰復興運動が前提となつて成立したとされている。大覚醒の起きる以前のアメリカは植民地間の交流が少なかったことから、この運動は真の意味での国家的出来ごととなった。千年王国が成就する時が必ず到来すると植民地の人々に自覚させ、人々をそこへ導くことが神か

ら与えられた使命だと当時の植民地人は信じていたのであろう。

3 南北戦争と千年王国論

前節では植民地時代からアメリカ革命期の千年王国論について論じた。ここでは、南北戦争期の千年王国論について見ていくことにしよう。具体的には、ウィリアム・ゲイロード牧師の説教(一八六二年)とアーネスト・リー・テュヴソンの *Redeemer Nation* の一節から、当時の人々が抱いた千年王国論について確認しておきたい。

一八六二年一〇月のある日曜日、ニューハンプシャー州フィッツウィリアムにある会衆派教会は、青いコートを着た男たちで埋め尽くされていた。北軍の義勇兵一中隊が南北戦争の意味についてゲイロード牧師の説教を聴くためであった。

炎と血の洗礼を受け、恐怖と暗闇を生み出したこの夜を戦い抜いた暁に到来するその日は、わたしたちの愛する祖国にとつて、ああ、なんとすばらしい日となることであろう。それは、新たな生命と、未来への再生を経験する日である。到来しつつある未来の栄光はすでに山の頂を金色に輝かせているではないか。未来の栄光がもたらされるその日の到来は早まりつつある。⁽³²⁾

牧師は南北戦争の神学的意味を説いたが、この時代、これに似た説教は北部全域で行われていたようである。また、ピラードとリンダーによれば、ジュリア・ウォード・ハウの「共和国の戦争賛歌」を歌った北部諸州の人々は、その目で「主の到来の栄光」を見た⁽³³⁾と実際に信じていたという。

他方、テュヴソンは、南北戦争の一因となった奴隷制度に関して直接的に言及し、この戦争の意味についてつぎのように述べている。

「一八五〇年代に樂觀論が湧き上がる背景には「全面的な神の戦い」への予測があった。それゆえ戦争の勃発は、われわれの予想通りに自信を粉碎することはなかった。奴隷制度の廃止をめぐる苦悩は、国民の犯した悪事に対する天罰であると同時に、選ばれし民が自らの息子たちを犠牲にすることで、ここアメリカや世界中の、モトレイが「特権」と呼んだものに対する致命的な一撃の加え方として説明されるようになった。そして、結果的に合衆国は存続し強化され、闇の諸力が決定的に敗北したように思われた。それは千年王国の希望を確認するものと思われた。恐らく、ハルマゲドンは戦わ⁽³⁴⁾れていたのである。

南北両陣営が四年にわたって戦い六〇万人を超える死者を出し

たこの戦争は、ハルマゲドンに喩えるのが相応しかった。それほど熾烈なものであったに違いない。奴隷制廃止論者からすれば奴隷制は反キリスト、つまり悪の作用である。善と悪との対決という構図は、まさにハルマゲドンである。南北戦争においては、こうした多くの「犠牲」を払い、その結果合衆国の「再生」が実現したのである。

ここまで、植民地時代とアメリカ革命期を含む初期のアメリカにおける千年王国論と、南北戦争期の千年王国論を見てきた。それでは次にアメリカ近現代史における千年王国論について、特にイスラエルとの関係に焦点を絞って、論じることしよう。

六 アメリカ近現代史における終末論

近現代の終末論を理解するには、第一に、前千年王国論と一九世紀に登場し二〇世紀に拡大したデイスペンセイション主義という二つの神学思想、第二に、デイスペンセイション主義を信奉するキリスト教シオニスト運動、第三に、一九七〇年代後半、アメリカで台頭した宗教保守派の中の原理主義者（根本主義者）の影響と彼らを中心とするキリスト教シオニスト運動に注目しなければならぬ。以下順を追って見ていくことにしよう。

1 デイスペンセーション主義

キリスト教原理主義者とは、キリスト教福音派の中でデイスペンセーション主義を信奉する者を指す。福音派とは、つぎの四つの特徴を有している。

- ① キリストの代理贖罪——キリストが人々の罪を一身に背負って十字架上で死んだことで、神の恩恵によって人々の罪が贖われたと信じる。
- ② 個人的な救い主であるキリストとの霊的交わり、つまり回心体験（ホーンアゲイン体験）を持つ。
- ③ 『聖書』の記述は神の言葉であり間違いないと信じる。
- ④ 福音を社会に広げるといふ実行力をともなった強い意志を持つ。³⁵⁾

原理主義者は、福音派の四つの特徴に加えて、つぎの三つの特徴を持つとされる。

- ⑤ 世俗社会とは一線を画す分離主義を貫く。
- ⑥ 『聖書』の記述を一字一句忠実に理解しようとする。
- ⑦ 前千年王国論とデイスペンセーション主義を信奉する。³⁶⁾

それではつぎに、デイスペンセーション主義について見ていこう。デイスペンセーション主義は、イギリス国教会系列のアイランド国教会から離脱した牧師ジョン・ネルソン・ダービー（一

八〇〇—八二）が主に『旧約聖書』の「ダニエル書」と『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」に基づいて編み出し、その後、アメリカの会衆派牧師C・I・スコフィールド（一八四三—一九二二）が体系化し、アメリカ全土に広めた神学思想である。

この思想は、人類の歴史を『聖書』の記述に従って七つの時代に分類し、それぞれの時代を通じて神の統治原理に従って人間が神に服従すると説く。キリストの再臨があると解釈されている第六番目は千年王国の前の段階であり、キリストが再臨する段階である。この教会もしくは恵みの時代を通じて、キリストが再臨するまで世界は劣悪化の一途を辿る。この時代の信徒は、再臨はいつかわからないが千年王国の到来の前に必ずやってくるので、信仰を深め再臨に備える必要があると考える。キリストの再臨は突然訪れる。しかも、現代が第六番目の時代ともなれば、弥が上にも再臨の臨場感が増し、切迫感が増幅される。原理主義者は、前千年王国論とこのデイスペンセーション主義を信奉することから、世俗社会とは一線を画し、分離主義を貫くのである。³⁷⁾

2 初期のデイスペンセーション主義者とキリスト教シオニズム運動

シオンとはイスラエルを意味するが、シオニズムとはユダヤ人

国家を再建すること、つまりイスラエルへの回帰運動という意味である。一般に、シオニズム運動はユダヤ人による祖国復帰運動を意味するが、実は、キリスト教徒の中にもこのシオニズム運動を推し進める人々がいる。彼らこそ、デイスペンセーション主義の信奉者なのである。

アメリカ人のキリスト教シオニスト運動は、一九世紀末に始まる。メソジスト派教会の指導者でありデイスペンセーション主義の信奉者であったウィリアム・E・ブラックストーン⁽³⁸⁾（一八四一―一九三五）は、「シオニズムの父」と呼ばれる。一八八九年彼はパレスチナを訪問中に、『旧約聖書』『エレミヤ書』（三一章三八節）の「見よ、主にささげられたこの都が、ハナンエル塔から角の門まで再建される日が来る、と主は言われる」という一節を日記に書き記し、シオニズムへの献身の意を新たにしたい⁽³⁹⁾。さらに、折しもロシア帝国政府が、一八八一年の五月法（May Laws of 1881）の施行により、帝国内に住むユダヤ人に対し、都市以外の場所での居住、商取引、土地賃貸の禁止、日曜日の商業活動の禁止といった非人道的な処遇をしていることを知ったブラックストーンは、一八九一年二月、後に「ブラックストーン請願書」（“The Blackstone Memorials”）として知られることになる「ユダヤ人のためのパレスチナ」という請願書を、時の国務

長官ジェイムズ・G・ブレーンに送っている。ブラックストーンは嘆願書にこう書いた。

ロシア帝国内のユダヤ人についてどのような対応がなされるべきでしょうか。ロシア帝国に対して内政干渉に当たることを行うのは賢明ではなく、無駄でありましょう。ユダヤ人は何世紀にもわたり、かの地で外国人として居留して参りましたが、限りある資源から考えれば、ロシア政府にとり彼らは迷惑なお荷物であり、貧しい自国民の福祉を考えても迷惑な存在と見られています。したがって、彼らの居留を許可することはないでしょう。（中略）スペインのセファルディムと同様に、アシケナジムも国外への移住を必要としております。しかし、二〇〇万人に及ぶ哀れな貧農たちをどこに移住させればよいのでしょうか。ヨーロッパは人であふれ、これ以上貧しい農民を受け入れる余裕などありません。アメリカに移住させましょうか。これは、何年もの年月を要し、多大の出費を必要とします。

パレスチナをもう一度彼らに返還してはいかがでしょうか。神が為された諸国民の配置によりますと、かの地は彼らの故郷です。彼らが力づくで追放された、何人も奪うことのできない所有物であります。彼らが耕作していた頃、かの地は非

常に豊かな土地でありました。勤勉に耕された丘の斜面や溪谷が多数のイスラエルの民を養いました。彼らは商業を重視する国民であると共に、農耕民であり、生産者でもあります。文明と宗教の中心なのであります。⁽⁴⁰⁾

一八九一年三月五日ブラックストーンは國務長官の仲介で、時の大統領ベンジャミン・ハリソンに面会をし、請願書を手渡す。大統領は目を通しておく旨ブラックストーンに伝えたという。しかし、その後のパレスチナの土地をめぐる進展は、イギリス政府がシオニズム支持を表明したバルフォア宣言（一九一七年一月）を待たねばならなかった。ブラックストーンは、連邦最高裁判事ルイス・D・ブランドイスの誘いでユダヤ人のアメリカ・シオニスト機構の集会に度々招待され、「シオニストの父」と呼ばれるようになるが、シオニスト運動の指導者たちの公認と協力を得て、一九一六年には「ブラックストーン請願書」を改定する。その後、ジェネラル・アセンブリー長老派教会USAなどの諸教派の公認を得た請願書は、非公式な形でウッドロー・ウィルソン大統領の手に渡ったと伝えられている。⁽⁴¹⁾バルフォア宣言にこの請願書がどの程度の影響を与えたかについて証明するものは何もないが、「間違いなく、彼「大統領」はこの文書を熟読したことであろう。」⁽⁴²⁾

3 現代のキリスト教シオニスト

一九七〇年代後半から、キリスト教原理主義者を中心に福音派を動員した宗教・政治運動、宗教右派（キリスト教右派）が形成されていく。⁽⁴³⁾宗教右派の運動を牽引したのは、モラル・マジョリティのジェリー・ファルウェルであり、キリスト教連合のパット・ロバートソンであった。こうした宗教右派の指導者が中心となり、議会へのロビー活動が始まる。一般に彼らは、国内問題では人工中絶や同性婚反対を唱えるが、対外政策ではイスラエルを支持するだけでなく、資金援助も行ってきた。たとえば、「イスラエルのためのキリスト教徒連合」(Christians United for Israel) という利益団体は、テキサス州サンアントニオの福音派のメガ・チャーチ「コーナーストーン教会」(信者数一万八〇〇〇人)のジョン・ヘイギー牧師が創設した。信徒に対して「神は土地を手放すことに反対である」と語っている。また、イスラエルへの移民の定住支援のため二二〇〇万ドルの資金援助を行った。さらには、リチャード・アーメイ元下院議長やトム・デレイ元下院院内総務といった連邦議会の主要な議員でキリスト教シオニストの活動家たちも議会に圧力をかける勢力となった。⁽⁴⁴⁾

現代のキリスト教シオニストで最も早い時期にイスラエルを訪問し、いわばキリスト教シオニストとイスラエルとの橋渡しの役

割を担った、宗教右派の指導者ジェリー・ファルウェルがどのようにしてイスラエルとのコネクションを形成したかを確認してこう。

千年王国論研究者のティモシー・P・ウェーバーは、キリスト教デイスペンセーション主義者とイスラエルとの関係がジェリー・ファルウェルの場合ほど進展したケースは他にないと述べている。ファルウェルは、一九七〇年代末にリカード党が権力を掌握して以来、ベギン首相を含む当時の政界の指導者と親密な関係を容易にしかも素早く確立し、アメリカ国内におけるイスラエル政府の最も良き理解者であり支持者となった。七八年にファルウェルは、イスラエル政府の招きで聖なる地を訪れ、植樹式を行い同国との連帯を示したが、一年後に再度招待され、ヨルダン川西岸地域一帯に広がるイスラエル人の入植推進計画を承認し、その光景が広報用のポスターで紹介された。こうした親交を顕彰するために、ベギン首相は一九八〇年、二〇世紀初頭の右派シオニスト運動指導者の名に因んで設けられたヴラディミール・ジャボチンスキー勲章をファルウェルに授けた。⁽⁴⁵⁾

一九八一年、イスラエルがイラクの原子炉に先制攻撃を加えた際にベギンはファルウェルに支持を求め、彼はこの軍事行動への支持を表明した。翌八二年、レバノン侵攻の際も彼は声高にイス

ラエルの擁護を買って出た。そのほかに、ファルウェルはイスラエルへのツアーを実施した。一九八二年、モラル・マジヨリティからおよそ四〇名の指導的立場にあった教会員を連れてイスラエルを訪れている。八〇年代から九〇年代にかけて、彼は教会と政治的人脈を最大限に利用して多くのツアーに出資した。一九九八年には自らが経営するリバティー大学の新入生三〇〇〇人をイスラエルへのスタディー・ツアーに参加させている。⁽⁴⁶⁾

こうしたジェリー・ファルウェルによるイスラエルへの接近と人脈作りはキリスト教シオニストおよび宗教右派による活発なロビー活動に結実し、アメリカ政府の対イスラエル政策に多大の影響を与えて行くことになる。

七 現代アメリカにおけるイスラエル支持とキリスト教

前節で論じたファルウェルの親イスラエルの対応は、キリスト教シオニストに限られたことではない。米政府も国民も、一貫して支援の手を差し伸べてきた。ここでは、イスラエルの建国後の具体的なイスラエル支持について見ていくことにしよう。

1 イスラエル建国以降のアメリカ政府によるイスラエル支持

一九四八年にイスラエルが独立宣言を行うと、トルーマン政権は早速支持を表明する。アメリカのキリスト教徒は主流派（非福音派）、福音派を問わずこれを支持した。ところが、一九六七年の第三次中東戦争を機に、このイスラエル支持に変化が生じる。イスラエルがヨルダン川西岸地区およびガザ地区を占拠したが、主流派は、イスラエルの占領政策に嫌悪感をあらわにしたからである。一九七七年に、リクード連合を結成したメナッハム・ベギンが政権を握ると、今度は福音派とイスラエル政府の関係が親密化していく。こうして保守的な福音派がイスラエル支持を強めていくことになる。⁽⁴⁷⁾

つぎに、アメリカ政府によるイスラエルへの援助を具体的な事例を挙げながら見ていこう。二〇〇五年度を例に挙げれば、対イスラエルの直接的経済・軍事援助総額は、およそ一五四〇億ドルだった。しかもこの額は借款ではなく、直接援助金である。⁽⁴⁸⁾

軍事援助では、アメリカは最上級のアメリカ製兵器の利用権限をイスラエルに与えている。F15および16戦闘機やブラック・ホーク、あるいはクラスター爆弾などの利用権限を与えている。また、五〇万ドル未満であれば事前の審査なしに使用できる権限も与えた。以上に加えて、兵器開発としておよそ三〇億ドルの予算

を計上しているのである。⁽⁴⁹⁾

二〇一二年三月一二日に発表された「合衆国対イスラエル対外援助（“U.S. Foreign Aid to Israel”）」によれば、第二次世界大戦以来米国の対イスラエル援助の累積額は世界最大であり、二国間での取り決めに基づく累積援助総額は一一五〇億ドルに達する。

過去においてイスラエルは経済援助を受けてはいるものの、二国間協定による対イスラエル援助は、ほぼすべて「軍事援助の形」で行われてきた。二〇〇七年には、ブッシュ政権がイスラエル政府と向こう一〇年間で三〇〇億ドルの軍事援助パッケージに合意している。オバマ政権は二〇一三年度、対イスラエル軍事援助として三一億ドルの予算を計上する計画である。⁽⁵⁰⁾

現在アメリカは連邦政府の財政赤字一五兆二〇〇億ドルを削減する必要があるにもかかわらず、赤字削減のためのプログラムからは対イスラエル援助は除外されてきた。二〇一一年三月、米イスラエル・パブリック・アフェアーズ委員会は、「対外援助は米国の安全保障戦略上不可欠の要素」と主張する覚書を発表した。⁽⁵¹⁾

2 アメリカ国民のイスラエル支持およびその理由

ところで、アメリカ国民はイスラエルをどのようにみているのだろうか。図表1は一九八八年から二〇一二年までの間で、イスラエルもしくはパレスチナを支持する国民の割合の変遷を追ったグラフであるが、イスラエル支持が三七%から六四%の間で、パレスチナ支持は七%から二〇%の間で推移しており、イスラエル支持が一貫して高い水準を保っていることが見て取れる。なぜこのように多くのアメリカ国民はイスラエルを支持するのであろうか。

理論的・神学的には本稿で論じてきた千年王国論という終末論の論理から説明できるかもしれない。すなわち、約束の地を神から与えられていたイスラエルの民がその地を追放されディアスポラを経験した。そこから救世主待望論が生まれた。その救世主待望論をキリスト教が受け継ぎ、新大陸アメリカに約束の地を見出した。そして、新約聖書の黙示録の記述からキリストの再臨に備える心の構えが敬虔なキリスト教徒に形成された。したがって、ハルマゲドンの地であり、再臨の地でもあるイスラエル国の首都エルサレムの安寧は彼らの魂の救済の重要な条件となり、「希望の幻視」の中にあつたのである。⁽⁵²⁾

さて、アメリカ人のイスラエル支持に対するこの理論的・神学

的説明は、正しいのであろうか。最後にイスラエル支持の理由について、アメリカ国民に対する世論調査を検討してみよう。

二〇〇二年のイスラエル支持の理由に関するギャラップ調査(図表2)で、最もポイントの高かったのは「テロと戦っている/攻撃を受けている」で、プロテスタントが二〇%、カトリックは二六%であつた。つぎにポイントが高かった質問は「土地所有の権利は聖書に記されているから」で、プロテスタントが一九%、カトリックが一一%となつている。そのつぎにポイントが高かったのは「国家建設はユダヤ民族の運動だから」で、プロテスタント九%、カトリック五%であつた。⁽⁵³⁾イスラエルの選民思想を反映した項目への回答率の高さが見て取れる。

つぎに、別の調査(図表3)で、イスラエルについて「聖書の出来事が起きる聖地」と答えたのは三〇%で、「聖地ではなく歴史的な土地」と答えたのは四七%であつた。しかし、「その他の理由で聖地」という項目を選んだ二〇%を加えると、六七%となり、歴史的な理由よりも宗教的な理由がより高いことがわかる。⁽⁵⁴⁾

同じ調査の図表4は、福音派と非福音派とでイスラエルを聖地か単なる歴史的な土地かのどちらかを考えているかを見る調査である。福音派では、「聖書の出来事が起きる聖地」と答えた者は五四%、「その他の理由で聖地」とした者が一六%で、合計七〇%

の福音派はイスラエルは聖地と答えている。一方「聖地ではなく歴史的な土地」と答えた非福音派は六四%だった。聖地と答えた回答者が六ポイント多いことになる⁽⁵⁶⁾。

二〇〇六年の調査は三種類ある。図表5（複数回答）は、イスラエルがユダヤ人に約束された土地かどうか、また、イスラエルでイエスの再臨が起き預言が成就するかどうかを、人種、教派、信仰の内容別に問うものである。「イスラエルは神に約束された土地」と答えたのは、白人福音派の六九%であり、これは主流派より四二ポイント高い。同じ質問に「神に約束された土地」と答えたのは、聖書の記述が神の言葉で逐語理解が必要と考える人では、白人福音派が七〇%であり、これは逐語理解しない人より三六ポイント高い。一方、後者のイエスの再臨の預言が成就すると信じる人のうち、同じ質問に「神に約束された土地」と答えたのは、白人福音派が五九%であったが、これは主流派より四〇%高い。逐語理解が必要な人の六二%がそのように答えているのに対して、聖書を逐語理解しない人では二六%であり、逐語理解する人の方が三六%高いことが分かる。

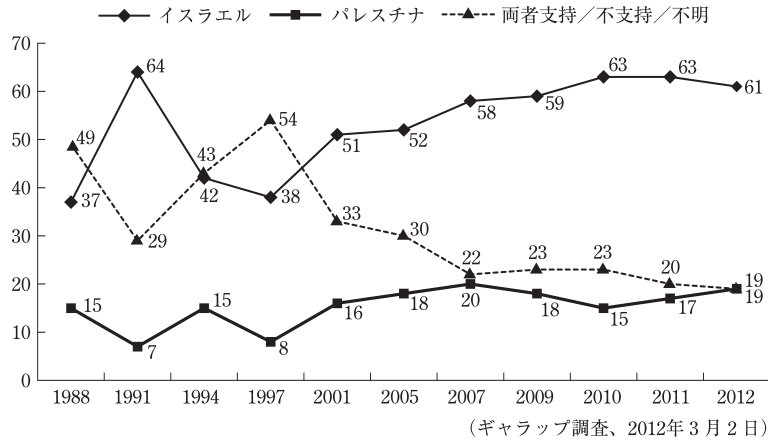
図表6では、イスラエル支持者、パレスチナ支持者、両者支持もしくは不支持の三つのグループについて、「イスラエルは神がユダヤ人に与えた土地」と考えるか、「イスラエルは聖書の預言

が成就した国」と考えるかを問う調査である。全体では、イスラエル支持者が四四%、パレスチナ支持者は九%、両者支持もしくは不支持が二五%であった。「イスラエルは神がユダヤ人に与えた土地」では、イスラエル支持者の六三%が肯定しており、三六%は否定している。また、「イスラエルは聖書の預言が成就した国」では、イスラエル支持者の六〇%が肯定し、三八%が否定している。イスラエル支持者の六割あるいはそれ以上がイスラエル国の存在を聖書の記述と関連づけて考えていることが分かる。

図表7（複数回答）は、再臨への信仰を持つ人、再臨は聖書に啓示されていると考える人、再臨は回答者の生きている間に実現すると答えた人について、人種、教派、信仰の内容別に問うものである。調査対象全体では、再臨への信仰を持つ人は七九%。再臨は聖書に啓示されていると信じる人は三三%。生きている間に再臨があると信じる人は二〇%であった。白人福音派では、再臨への信仰と答えた人が九五%、聖書の逐語理解と答えた人が九五%といずれも高く、アフリカ系プロテスタントの場合は九二%と高い。これは、アフリカ系プロテスタントも白人福音派に近い信仰をもっていることを物語っている。

このように、イスラエルの支持は、単に理論的・神学的レベルのものであるだけでなく、国民の信仰とも深い関係があることが

図表1 イスラエル支持の変遷

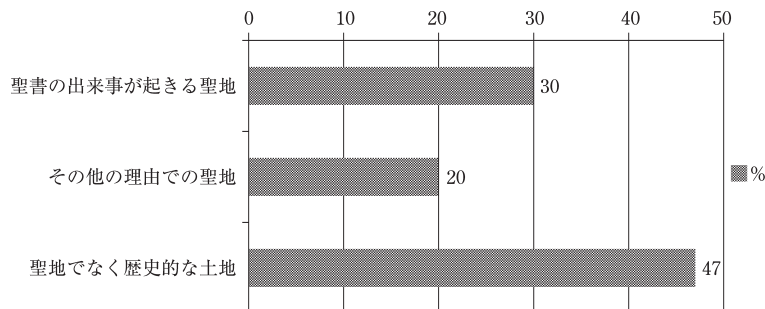


図表2 イスラエル支持の理由

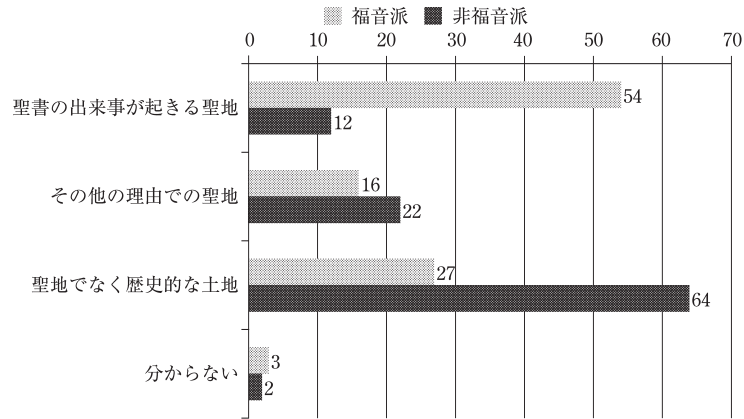
あなたはなぜイスラエルを支持するのですか？	プロテスタント (%)	カトリック (%)
テロと戦っている／テロ攻撃を受けているから	20	26
土地所有の権利は聖書に記されているから	19	11
国家建設はユダヤ民族の運動だから	9	5
ユダヤ人は歴史的に迫害を受けてきたから	5	9
イスラエルは安定している／交渉が容易だから	6	4
パレスチナ人はイスラエルと交渉しようとしなから	5	6
パレスチナ人／アラブ人は信用できないから	5	6
イスラエルは敵に囲まれ危険な状況だから	3	4
イスラエルはアメリカの同盟国だから	1	5
その他	12	11

(ギャラップ調査、2002年4月29日)

図表3 イスラエルは聖地か、単なる歴史的な土地か

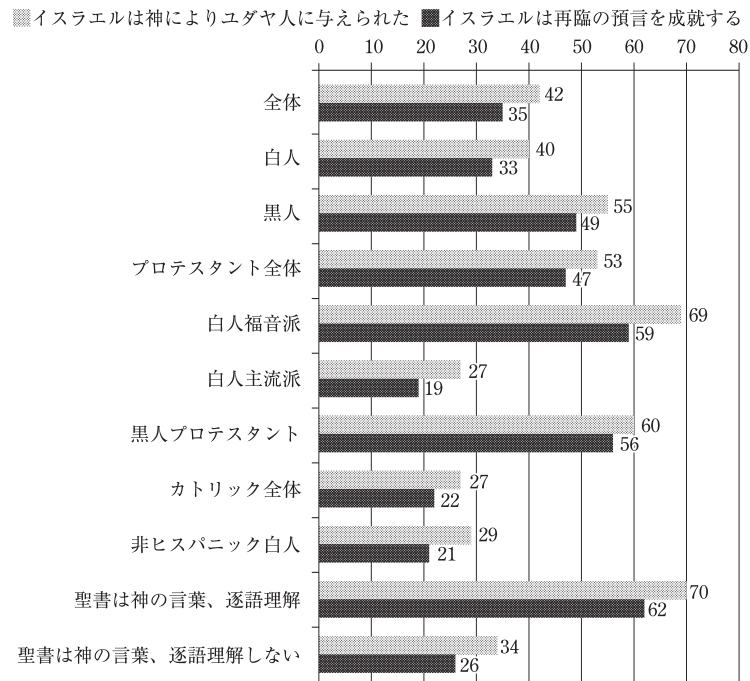


図表 4 信仰別理由



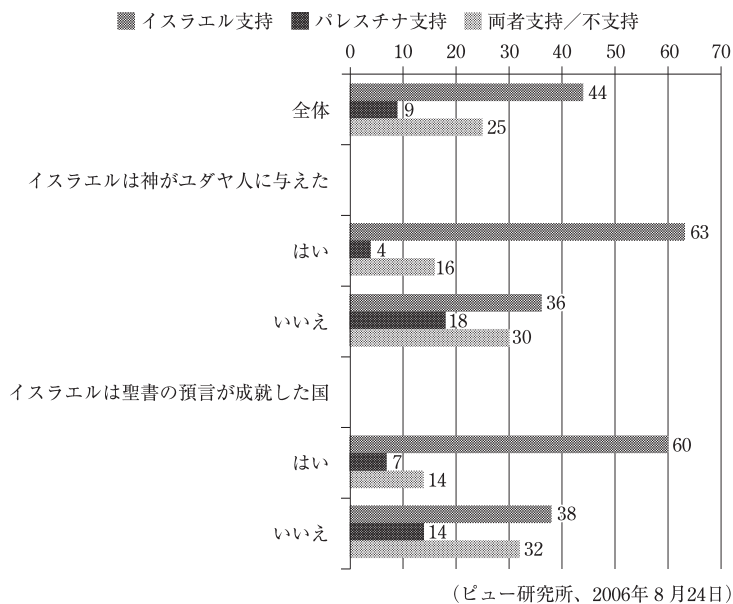
(ギャラップ調査、2003年7月29日)

図表 5 神観、聖書の預言、イスラエル (複数回答)

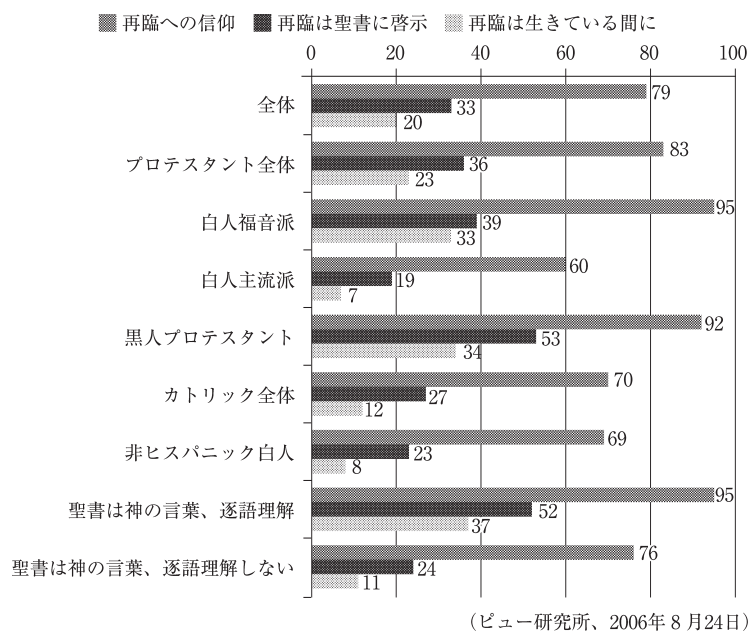


(ピュー研究所、2006年8月24日)

図表6 イスラエル支持／不支持与信仰との関係



図表7 教派や信仰別の再臨への信仰（複数回答）



理解できるであろう。

八 おわりに

本稿では、千年王国論というキリスト教神学の終末論を援用しつつ、アメリカ文明における「イスラエル」の意味について考察を加えてきた。すなわち、終末論の立場から植民地時代のニューイングランドにおけるピューリタンによる聖書解釈について確認し、初期のピューリタンがイスラエルの民が抱いた選民意識を共有し、自らを新しいイスラエルとして見ていたことを確認した。そして、こうした選民意識はさらに、解放のモチーフと結びついて、選ばれた民の救済と神による反神的な権力国家の破壊を伴うこと、そして選ばれた民は「主の戦い」を遂行したことを確認した。

ついで、アメリカ革命期および南北戦争における終末論を検討した。アメリカ革命期前後ではジョン・コットンとジョン・ナサン・エドワードを取り上げ、彼らの終末論を確認した。コットンの千年王国論はカトリックを反キリストとしつつもキリストの再臨については何も語っていないが、エドワーズは、段階的進展を重視し、福音伝道を主体とする後千年王国論に立つ終末論であった。

さらに、一九世紀にスコフィールドが提唱したデイスペンサーション主義と千年王国論について論じ、イスラエル国の建国以前、キリスト教保守派でデイスペンサーション主義の信奉者であったウィリアム・E・ブラックストーンによるイスラエル国樹立に向けての動きについて論じた。建国後は、キリスト教保守派でモラル・マジョリティの創設者ジェリー・ファルウェルを取り上げ、彼のイスラエル支持と人脈作りを見てきた。そして最近の世論調査で終末論を跡付ける形で国民によるイスラエル国支持の検証を試みた。

本稿ではユダヤ系アメリカ人および関連諸団体によるイスラエル・ロビーの影響力については論じなかった。また、ジェリー・ファルウェル以外のキリスト教保守派指導者によるロビー活動については検討することができなかった。この点は今後の研究課題としたい。

なお、本稿は二〇一二年七月二六日に開催された麗澤大学比較文化文明研究センター主催のアカデミック・ワークショップにおける発表原稿を基に作成したものである。当日参加してくださった同センターの同僚の研究員や客員研究員の諸先生方より有益なコメントを頂いたことに対し謝意を表したい。

注

- (1) 「創世記」、『聖書新共同訳』日本聖書協会、一九八七年・第二章、二一二節。
 - (2) 前掲書・第一章、一一八節。
 - (3) 『アメリカの民主政治(中)』(井伊玄太郎訳) 講談社学術文庫、二〇〇四「一九八七」年、一二七頁。
 - (4) Robert N. Bellah et al., *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*. Berkeley: University of California Press, 1985, p. 219. 邦訳: ロバート・N・ベラーほか『心の習慣』(島蘭進、中村圭志訳) みすず書房、一九九一年、一五六頁。
 - (5) 「メイフラワー盟約」(二六二〇年)、『アメリカ古典文庫15 ピューリタニズム』(大下尚一訳、研究社、一九七六年、四五―六頁。
 - (6) こうして始まった移住のうねりは一六四〇年まで続き、その間におよそ二万一千人が新大陸に移住した。当時のロンドンの人口が二万人強であったことを考えると、移住の規模は決して小さいものではなかった。(岩井淳『千年王国を夢見た革命』講談社選書メチエ、一九九五年、五二―四頁)
 - (7) 「丘の上の町」の出典: 『マタイによる福音書』、第五章、一二―一六節。
 - 13 「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。14 あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。
 - 15 また、ともし火をともして灯の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものをすべてを照らすのである。16 そのよう
- に、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」(ゴチックは筆者による。)
- (8) ジョン・ウィンスロップ『キリスト教徒の慈愛のひな型』(二六三〇年)、『アメリカ古典文庫15 ピューリタニズム』(大下尚一訳、研究社、一九七六年、一二四―二五頁。
 - (9) 大西直樹「丘の上の町」遠藤泰生編『資料で読むアメリカ文化史1』東京大学出版会、二〇〇五年、八八頁。
 - (10) Richard Pierard and Robert Linder, *Civil Religion and the Presidency*, Grand Rapids, MI: Zondervan, 1988, p. 276. 邦訳: リチャード・ピラードとロバート・リンダー『アメリカの市民宗教と大統領』(堀内一史、犬飼孝夫、日影尚之訳) 麗澤大学出版会、二〇〇三年、三二九頁。
 - (11) Robert N. Bellah, "Civil Religion in America," *Beyond Belief: Essays on Religion in a Post-Traditional World*. New York: Harper & Row, 1970, p. 175.
 - (12) ピラードとリンダー『アメリカの市民宗教と大統領』(堀内、犬飼、日影訳) 麗澤大学出版会、二〇〇三年、一〇三―一五頁。
 - (13) 拙著『分裂するアメリカ社会』麗澤大学出版会、二〇〇五年、一二〇頁。
 - (14) Martin Luther King, Jr., *Strength to Love*. New York: Harper & Row, 1963, p. 82.
 - (15) Stephen B. Oates, *Let the Trumpet Sound: The Life of Martin Luther King, Jr.*. New York: Harper & Row, 1982, p. 486.
 - (16) マッキンリーおよびジョージ・W・ブッシュ大統領をめぐる市民

- 宗教論に関しては、ピラードとリンダー『アメリカの市民宗教と大統領』（堀内、犬飼、日影訳）麗澤大学出版会、二〇〇三年、および拙著『分裂するアメリカ社会』麗澤大学出版会、二〇〇五年を参照されたい。
- (17) Jürgen Molmann, *Das Kommen Gottes: Christliche Eschatologie*, Gütersloher Verlagshaus, 1995, 195. 邦訳：J・モルトマン『J・モルトマン組織神学論叢5 神の到来』（蓮見和男訳）新教出版社、一九九六年、二六八頁。
- (18) *Ebd.*, 198; 前掲書、二七二頁。
- (19) 山折哲雄監修『世界宗教大辞典』平凡社、一九九一年、一一三三頁。
- (20) J・モルトマン『J・モルトマン組織神学論叢5 神の到来』（蓮見和男訳）新教出版社、一九九六年、二四〇頁。
- (21) 前掲書、二四〇―一頁。
- (22) 前掲書、二三四頁。
- (23) 岩井淳『千年王国を夢見た革命』講談社選書メチエ、一九九五年。
- (24) 前掲書、一〇一頁。
- (25) 前掲書、一〇〇頁。
- (26) 拙著『アメリカと宗教：保守化と政治化のゆくえ』中央公論新社（中公新書）、二〇一〇年、一一―三頁。
- (27) 野村文子『千年至福期』、『史料で読むアメリカ文化史1』東京大学出版会、二〇〇五年、二二―四―五頁。
- (28) 野村文子『ジョナサン・エドワーズとミレニアリズム』井門富士夫編『アメリカの宗教伝統と文化』大明堂、一九九二年、一六七―一八四頁。
- (29) 前掲書、一七七頁。(Alan Heimert and Perry Miller, eds., *The Great Awakening: Documents Illustrating the Crisis and Its Consequences*. Bobbs-Merrill, 1967, p. 26.) 野村によれば、ティモシー・P・ウェーバーも「ピューリタンをはじめ、当時の人々は圧倒的に千年王国説を信じていたが、一八世紀の中頃に後千年王国説に傾いていった。この変化に最も功績があったのは、独立戦争前のアメリカの指導的神学者、ジョナサン・エドワーズである」と述べ、エドワーズが後千年王国説に立つたことを認めている。(Timothy P. Weber, *Living in the Shadow of the Second Coming: American Premillennialism, 1875-1982*. Chicago: University of Chicago Press, 1987, p. 13.)
- (30) 前掲書、一七九頁。
- (31) Nathan O. Hatch, "The Origins of Civil Millennialism in America: New England Clergymen, War with France, and the Revolution," *William and Mary Quarterly* 31 (July 1974): p. 429.
- (32) ピラードとリンダー『アメリカの市民宗教と大統領』（堀内、犬飼、日影訳）麗澤大学出版会、二〇〇三年、一一―一二頁。文中の「です・ます」調は筆者が「だ・である」調に統一した。
- (33) 前掲書、一一二頁。
- (34) Ernest Lee Tuveson, *Redeemer Nation: The Idea of America's Millennial Role*. Chicago: University of Chicago Press, 1968, pp. 191-2.
- (35) ギャラップ調査やピュー研究所などの調査機関が採用する定義は、②～④に倣う。
- (36) George Marsden, *Fundamentalism and American Culture*,

- New Edition, New York: Oxford University Press, 2006; Nancy T. Ammerman, "Chapter 1 North American Protestant Fundamentalism," pp. 1-65, in Martin E. Marty and R. Scott Appleby, eds., *The Fundamentalism Project: Fundamentalisms Observed*, Vol. 1. Chicago: The University of Chicago Press, 1991.
- (37) 拙著『アメリカと宗教：保守化と政治化のゆくえ』中央公論新社（中公新書）二〇一〇年、三三―四頁。
- (38) 一八四一年、ニューヨーク州アダムズに生まれ、メソジスト派教会に通う家庭に育つ。一一歳で回心体験。南北戦後間もなく結婚し、イリノイ州オーク・パークに移り住むと、建物・財産の管理会社を興し成功する。仕事の傍ら在家のメソジスト教会員として活躍する。ブラックストーンは後にデイスペンセイション主義を奉ずるD・L・ムーディー等と知り合い、一八七〇年代にはこの神学思想による啓発活動に取り組むようになっていた。一八八七年に『イエスの来臨』などの書物を出版した。（Timothy P. Weber "How evangelicals became Israel's best friend," *Christianity Today*, 42, October 05, 1998, p. 7. Web.)
- (39) Jonathan Moorhead, "The Father of Zionism: William E. Blackstone?" *Journal of the Evangelical Theological Society*, December, 2010, p. 788.
- (40) *Ibid.*, p. 791. (William E. Blackstone, "The Blackstone Memoirs, 1891," Billy Graham Archive Center, Box 6, folder 2.)
- (41) *Ibid.*, pp. 797-8.
- (42) *Ibid.*, p. 799.
- (43) 一九四〇年代から六〇年代にかけてのアメリカ社会のリベラル化に伴い、犯罪発生率・離婚率などが高まり、伝統的家族の価値・性倫理が低下し、最高裁は公立学校での祈りを禁止し、人口妊娠中絶を容認するなど、宗教的価値を否定する動きが相次いだ。こうした趨勢に抗すべく、ニート・キングリッチなどの政治的保守のニューライトとテレビ伝道師のジェリー・ファルウェル牧師らは画期的な戦略で集票力を数段高め、一九七六年の選挙で、ジミー・カーターに投票したもののその政策に期待を裏切られ落胆した保守的な福音派の票を集め、一九八〇年の大統領選挙でロナルド・レーガン政権樹立の一翼を担った。宗教保守グループは次第に宗教右派（キリスト教右派）と呼ばれるようになる。詳しくは、拙著『アメリカと宗教』中央公論新社（中公新書）二〇一〇年を参照されたい。
- (44) John J. Mearnsheimer and Stephen M. Walt, *The Israel Lobby*. New York: Farrar Straus Giroux, 2007. 邦訳：ジョン・ミアシャイマー、ステイヴン・ウォルト『イスラエル・ロビーとアメリカの外交政策』（副島隆彦訳）講談社、二〇〇七年、五二頁。
- (45) Timothy P. Weber, *On the Road to Armageddon: How Evangelicals Became Israel's Best Friend*. Grand Rapids, MI: Baker Academic, 2004, p. 218.
- (46) *Ibid.*, p. 219.
- (47) ウォルター・ラッセル・ミード「なぜアメリカのキリスト教徒はユタや国家を支持するのか」『フォーリン・アフェアーズ日本語版』二〇〇八年、No. 9、八五頁。
- (48) ジョン・ミアシャイマー、ステイヴン・ウォルト『イスラエル・ロビーとアメリカの外交政策』（副島隆彦訳）講談社、二〇〇七年、五二頁。

- (49) 前掲書、六五—六頁。
- (50) Jeremy M. Sharp, “U. S. Foreign Aid to Israel,” *CRS Report for Congress*, Congressional Research Service, p. 5. Web.
- (51) Ibid., p. 2.
- (52) Elizabeth Mendes, “Americans Continue to Tilt Pro-Israel: More view Israel favorably than the Palestinian Authority or Iran,” Gallup Poll, March 2, 2012. Web.
- (53) J・ギンターマン『J・ギンターマン組織神学論叢の 神の到来』(蓮見和男訳) 新教出版社、一九九六年、一二—四頁。
- (54) David W. Moore, “Protestant Tilt Toward Israel Partially Explained by Biblical Connection: Catholic support more related to pragmatic concerns,” Gallup Poll, April 29, 2002. Web.
- (55) Lydia Saad, “Holy Land or Just Ancient?” Gallup Poll, July 29, 2003. Web.
- (56) “Many Americans uneasy with Mix of Religion and Politics,” The Pew Forum on Religion & Public Life, Per Research Center, August 24, 2006. Web.